古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 227 号（2021 年 10 月）

# 満洲文字・満洲語の銘文を持つ四種の硬貨について

吉池孝一

## 1. はじめに

後金（清）と清で発行された四種の硬貨の作製法・形態・銘文の在り方により、異なる文化を融合させるため、どのような工夫を凝らしたか、ということについて確認をする。

## 2. 無圏点満洲文字の銘がある「天命汗銭」

後金（清）のヌルハチが天命年間（1616-1626）に発行したとされる銅貨がある（図 1）。貨幣の情報はつぎのとおり。作製法：鋳造。形態：方形の穴がある中国伝統の穴銭。材質：銅。重さ：6.0g。大きさ：直径 28.00mm、厚さ 1.55mm。

表 1

表 2

裏

＊画像の表 2 は文字を見やすくするためにやや傾けて撮影したもの

図 1（古代文字資料館蔵）

満洲文字には無圏点満洲文字と有圏点満洲文字の二種がある。両者の解説は池上二良(1989)を参照[1]。この銘文は無圏点満洲文字で書かれた満洲語である。銘文には次のようにある[2]。満洲文字のローマ字への翻字には二種ある。無圏点満洲文字を大文字で、有圏点満洲文字を小文字で表記する方式である。ここでは有圏点満洲文字・満洲語を参考にして、無圏点満洲文字を小文字で表記し‘’で括ることにする。

左　‘abkai’（天の）

---

[1] 池上二良(1989)には次のようにある。「『満洲実録』によれば，清の太祖【ヌルハチ：吉池】は，1599 年（万暦 27 年），蒙古字を使って満洲語を書き表わそうとして額爾德尼（エールデニ）や噶蓋（カガイ）にも諮ったが，自分からこれを行って，満洲字ができた．それを，無圏点満洲字とよぶ．『満洲老檔』によれば，その後，太宗【ホンタイジ：吉池】は，1632 年（天聡 6 年）に達海（ダハイ）に改良を命じ，まるや点をつけて音をくわしく区別する有圏点満洲字ができた．」（1065 頁）。

[2] 池上二良(1989)は「太祖の時代の貨幣には，表に，ABKAI WOLINGKA KAN JIKA（=abkai fulingga han jiha，天命皇帝銭）とある．」（1065 頁）とする。銘文の満洲字とローマ字との対応は寺澤知美(2004)を参照。

右　‘fulingga’（命をもつ）

上　‘han’（汗=王）

下　‘jiha’（銭）

「天の命を持つ汗銭」となる。中国語読みでは「天命汗銭」とされる。方形の穴の上下左右に文字を配置する方式は、伝統的な漢字銭の文字の配置に倣ったものであるが、左→右のように、左から右に読み進むのは、満洲文字・満洲語の書写の方向が反映したものである。ついで、上→下に読むのは、伝統的な漢字銭の読み方が反映したものである。満文と漢文の文字の配置の方式が混在している。

なお文字の書きぶりについて、次節の天聡汗銭の銘文の文字と比べると、その相違は明らかであるが、筆記体の満洲文字の銘文から流麗であるとの印象をうけるのは私だけではないであろう。文字には、言葉の音と意味を伝えるという文字の主要な用法のほかに、美や祈りなどを表わす副次的な用法もある。本貨幣の銘文から、そのような文字の副次的な用法を見てとることができると考えるのであるが、いかがであろうか[3]。

3. 無圏点満洲文字の銘がある「天聡汗銭」

後金（清）の太宗ホンタイジが天聡年間(1627-1635)に発行したとされる銅銭がある（図 2）。貨幣の情報はつぎのとおり。作製法：鋳造。形態：方形の穴がある中国伝統の穴銭。材質：銅。重さ：38.0g。大きさ：直径 45.20mm、厚さ 4.05mm。

表　　裏

図 2（古代文字資料館蔵）

表裏の銘文は、無圏点満洲文字で書かれた満洲語である。天命汗銭のような筆記体ではな

[3] 吉池孝一(2021a) (2021b)は「文字の副次的用法」として、暫定的ではあるが、次の五つを認める。

ア．美を表現する用法（デザインとしての用法を含む）

イ．字形が喚起する印象を利用する用法（アの用法を除く。民族を示すなど）

ウ．祈りや願望を表現する用法

エ．字形の特徴により他と異なることを示す用法（印鑑の文字や自筆サイン）

オ．文字の書体などを変えて特定の部分を際立たせる用法

い。表と裏の銘文には次のようにある[4]。

左　‘sūre’（聡明なる）

上　‘han’（汗=王）

下　‘ni’（の）

右　‘jiha’（銭）

「聡明なる汗の銭」となる。中国語読みでは「天聡汗銭」とされる。四つの満洲語の意味のかたまりを方形の穴の上下左右に配置する方式は、伝統的な漢字銭に倣ったものである。それを「左→上→下→右」の順番で読むのは、満洲文字・満洲語の書写の方向が、“そのまま”反映したものである。天命汗銭が「左→右」の次に「上→下」と読み、一部に漢字銭の読み方（「上→下」と読む部分）を混在させるのとは異なり、本銭は完全に満洲文字・満洲語の書写の方向に従っている。

下の‘ni’は属格の助詞である。満洲文字・満洲語の正書法では、‘-ng’の後で‘ni’と表記し、それ以外の後では‘-n’を含めて、‘i’と表記するとふつうには説明がなされる。天聡汗銭の場合、‘han’であり‘-n’の後であるから、正書法としては‘i’とすべきであるが、‘ni’となっている。公的機関から大量に発行される貨幣の銘文は慎重に検討されるのがふつうであり、通常と異なっている部分があったとしても、それは単純な誤ではなく、作成者・発行者の何らかの意図を認めることができる。この点について、吉池孝一(2008)で初歩的な議論をしたことがある[5]。その後に提出された論考を参考にして再論したいところであるが、ここで詳しく述べるのは、本稿の主旨にそぐわないので稿を改めて述べることにする。

裏には貨幣の単位を書いた銘文がある。左の‘juwan’（十）は、硬貨の値であり“平銭”十枚に相当する“當十”の十である。右の‘emu yan’（一両）は重量であり、‘emu’は「一」で‘yan’は「両」[6]となる。この貨幣の場合、‘emu’の‘m’の字形が不明瞭であるが、他の銭譜に掲載されている同種の貨幣によって[7]、‘emu’であることを確認することができる。

4. 有圏点満洲文字の銘がある「光緒元寶」

清の光緒年間(1875-1908)に発行された銀銭がある（図 3）。貨幣の情報はつぎの通り。作製法：打刻。形態：西洋的な円銭。材質：銀。重さ：24.4g。大きさ：直径 39.13mm、厚さ 2.68mm。

---

[4] 池上二良(1989)は「太宗の時代の貨幣には，表に SŪRA KAN NI JIKA（=sure han ni jiha, 天聡皇帝の銭）とあり，銭背の左側には JOWAN（=juwan，十），右側にはＥＭＯ JAN（=emu yan，一両）とある.」（1065 頁）とする。

[5] ①この硬貨が作られた時期、子音の‘-n’[n]と‘-ng’[ŋ]（‘-ng’は、じっさいは[n]と発音された）の後で属格助詞の発音は[ni]であった。②天聡汗銭には、属格助詞を本硬貨のように‘ni’と綴るものと、‘i’（語末形ではなく単独形）と綴るものがある。③上記②よりみて、‘n’の後で‘i’と表記する正書法は確固としたものとなっていなかったなど。

[6] 池上二良(1989)、李俠・曉峰(1989)151 頁を参照。

[7] 國家文物局《中國古錢譜》編撰組編(1989)、376-377 頁。

表　　裏

図 3（古代文字資料館蔵）

これは西洋的な円銭である。表に漢文があり、「光緒元寶」という漢字が上下と右左に配されるのは中国の伝統的な銘文の方式に倣ったものであるが、周囲に文字を配するのは西洋の貨幣の銘文の方式に倣ったものである。周囲に、右から左に向かって漢文の「吉林省造」と「庫平七錢二分」があり、裏には、これと内容を対応させて、左から右に向かって英文の「KIRIN・PROVINCE」と「7 . CANDARINS. 2」がある[8]。

裏の龍の図像の周囲には、ラテン文字による英語と有圏点満洲文字による“漢語”と“満洲語”がある。文字が周囲に配されるのは西洋の貨幣銘文の方式に倣ったものであるが、満文は「左→右」のように読み進む。これは、満洲文字・満洲語の書写の方向が反映したものである。なお、満文は、左右ともに、装飾が施された文字のようにみえる[9]。満文の内容は次のとおりである。

左　‘daicing’（漢語の「大清」の音写）

右　‘gurun’（満洲語の「国」）

左の‘daicing’（大清）は漢語音を音写したもので、満洲文字で書かれた漢語である。右は満洲文字で書かれた満洲語である。これが漢語と満洲語が混交した一語の‘daicing gurun’（大

---

[8] 中村雅之(2011)は、英語の KIRIN は漢語音によらず満洲語の音に基づいたとする。「英語版 wikipedia の「Jilin」の項によれば、「吉林」の語源は満洲語の「girin ula」（＝along the river）で、その漢字音訳「吉林烏拉」の前の二文字を取って「吉林」としたものだという。英語でその地名を「Kirin」と表記したのは、漢字音に依らずに満洲語の音に基づいたことになる。清末の満洲語では「gi」が既に無声化して、漢語の無声無気音のように発音されていたために「ki」と表記されたのであろう。」（2 頁）。また重さを量る単位の「CANDARINS」について、「吉林以外の銀貨では「七銭二分」に当たる英語は「7 MACE AND 2 CANDAREENS」と記されるが、吉林省造の銀貨では「7. CANDARINS. 2」という表記である。これが「7. 2 CANDARINS」の意味であるなら、「七分二厘」に相当し、「七銭二分」にならない。なぜ吉林省造のものだけが特殊なのか不明である。」（2 頁。趣意）とする。

[9] 左の‘daicing’（大清）は文字の背の部分が屈曲しており、右の‘gurun’は‘gu’の部分が不自然なほどに大きい。これをデザインとみるならば、「文字の副次的用法」とすることができる。本稿の注 2 を参照。

清国）であることは、次の例からわかる。

‘daicing gurun’という語は、『新満漢大詞典』（胡増益主編）にもみえる。『新満漢大詞典』があげる档案館資料の文例に‘amba daicing gurun i...【‘i’以下は略す。‘gurun i’の‘i’は属格（～の）を表わす助詞】’(48・档) とあり、‘daicing gurun’がみえる。ここでは、‘daicing gurun’（大清国）に、‘amba’（大きい）が冠されており、これを逐語訳するならば 「大大清国」となるが、漢語としては「大清国」でよい。漢語と満洲語が混交した‘daicing gurun’（大清国）が、清国を表現する固有名詞として常用され、漢語の‘dai’（大）の意味が意識されなくなるとともに、“大いなる、偉大なる”という満洲語の‘amba’を、屋上に屋を架すように付され、‘amba daicing gurun’（大大清国）ができたとみる[10]。これより、本貨幣の‘daicing gurun’（大清国）は、漢語と満洲語の混交であることが意識にのぼらないほどになった語とみることができる。

5. 有圏点満洲文字の銘がある「大清銀幣」

清の宣統 3 年（1911）の銘がある銀銭がある（図 4）。貨幣の情報はつぎの通り。作製法：打刻。形態：西洋的な円銭。材質：銀。重さ：26.2g。大きさ：直径 39.23mm、厚さ 2.80mm。

表

裏

図 4（古代文字資料館蔵）

表に漢文の銘がある。「大清銀幣」という漢字が上下と右左に配されるのは中国の伝統的な銘文の方式に倣ったものであるが、周囲に漢字を配すのは西洋の貨幣銘文の方式に倣ったものである。周囲に、右から左に読み進む漢文の「宣統三年」がある。同じく周囲に、有圏点満洲文字の満洲語を一語ずつ意味の切れ目でまとめ、左から右にむかって読み進むように配する。

有圏点満洲文字・満洲語の内容は次のとおりである。これは漢文の「宣統三年」に相当する。なお、yoso-i（原則の）の-i は、属格助詞の語末形である。

gehungge（明亮なる）

yoso-i（原則の）

---

[10] このことについては Web サイト「古代文字資料館」中の解説「光緒元宝（吉林省造）」（文責：吉池孝一 2010.5.18）で述べたことがある。

ilaci（第三の）

aniya（年）

裏に龍の図像がある。龍の中央に縦に漢文で「壹圓」とある。周囲に漢文と同じ内容を意図した英文の「ONE DOLLAR」が横に左から右に向かって書かれている。

## 6. 結語

無圏点満洲文字の銘を持つ「天命汗銭」と「天聡汗銭」は、貨幣の作製法と形態は伝統的な中国の方式による。銘文の文字は、ソグド系[11]の無圏点満洲文字であり、言語はツングース系の満洲語である。行を左から右に進める満洲文字の基本を堅持しつつ、中国の伝統的な銘文の配置に適合させようと工夫をしている。

有圏点満洲文字の銘を持つ「光緒元寶」と「大清銀幣」は、貨幣の作製法と形態は西洋の方式による。銘文の配置は、文字を上下左右に配す中国の伝統的な銘文の配置と、文字を周囲に配す西洋の銘文の配置の両者を併用する。銘文の文字と言語は、漢字による漢語、有圏点満洲文字による満洲語、ラテン文字による英語の三種となっている。それぞれの書写の方向の基本を堅持しつつ、工夫して配置する。

これらの硬貨に、異なる文化の方式を融合させようとする工夫を、見てとることができる。

参考文献（発行年順）


國家文物局《中國古錢譜》編撰組編(1989)『中國古錢譜』北京：文物出版社。

池上二良(1989)「ツングース諸語」『言語学大辞典 第 2 巻 世界言語編（中）』東京 : 三省堂、1058-1083 頁。

李俠・曉峰(1989)『中國北方民族貨幣史』哈爾濱：黑龍江人民出版社。

胡增益主編(1994)『新満漢大詞典』新疆：新疆人民出版社。

寺澤知美(2004)「“天命汗銭”について」『KOTONOHA』第 20 号（2004 年 7 月）、4-5 頁。

吉池孝一(2008)「天聰汗錢の満文属格語尾について」『KOTONOHA』第 68 号（2008 年 7 月）、14-16 頁。

吉池孝一(2010)「貨幣の銘文について」『KOTONOHA』第 89 号(2010 年 4 月)、18-21 頁。

中村雅之(2011)「吉林省造の銀銭＜光緒元宝＞」『KOTONOHA』第 108 号（2011 年 11 月）、1-2 頁。

吉池孝一(2021a)「文字について(1)―文字の副次的用法―」『KOTONOHA』第 225 号（2021 年 8 月）、3-9 頁。(2021b)「文字について(2)―副次的用法の二―」『KOTONOHA』第 226 号（2021 年 9 月）、1-5 頁。


---

[11] ソグド文字は西方よりアジアの北部に持ち込まれ、ウイグル文字（9-14 世紀）、モンゴル文字（13 世紀-今に至る）、満洲文字（17-20 世紀）と改良されながら伝わり、現在の中国新疆ウイグル自治区のシボ族（錫伯族、清朝八旗の後裔）のシボ文字や中国内蒙古自治区のモンゴル文字となった。これらの文字をソグド系文字と称する。